

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月20日現在

機関番号：32635

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21653104

研究課題名（和文）地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすための基礎的研究

研究課題名（英文）The Basic Studies of the using local cultural Materials
that aids Educations of the Life / the Mind

研究代表者

滝沢 和彦 (TAKIZAWA KAZUHIKO)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：60197233

研究成果の概要（和文）：

今日、「いのち」の教育や「こころ」の教育の必要性が指摘されているが、そうした教育を学校で行う際に、政教分離の原則に反するとして、また特定の価値観の教え込み (indoctrination) に当たるとして批判されることが多かった。こうした教育を、地域文化、特に伝統的な文化を教材として取り上げることで無用の軋轢を避ける、あるいは軽減することができるのではないかと考えられる。

こうした問題意識から本研究では、以下の3つを行った。①地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすヒントとなる実践事例を集めて、その特徴を分析した。②そうした多くの実践が他の実践との関係に言及することなく行われているために、実践例についての情報や理論の蓄積がなされていない現状を確認した。③理論と実践例を分類し整理するための基準あるいは視点を析出することを試みた。

近年、「いのち」「こころ」の教育を「徳の教育」として見直す動向があるが、本研究は、そうした動向に対して、伝統文化に限らず、より広く地域の自然や観光資源、産業や特産品、そして郷土の人物等を具体的な教材とすることで抽象的な「徳の教育」を具体化する（可視化する）可能性を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

Today, it is insisted on necessity of educations of the Life / the Mind. On the other hand, frequently, especially in public schools, such educations are criticized as breaking the rule of separating church and state, also criticized as indoctrinating certain values. By using local cultural Materials for Educations of the Life / the Mind, it may become possible to avoid or pacify useless opposition.

Major achievements of this research project are following three. First, we collected and analyzed examples of teaching practice that give hints for putting local cultural materials to good use for Educations of the Life / the Mind. Second, we found out that each practices were not referred to mutually, and there were few theorizing or accumulating information of using local cultural Materials for Educations of the Life / the Mind. Third, we attempted to construct theories and criteria for classification of the example.

Recently, people are reevaluating Educations of the Life / the Mind, as Educations of virtues. In this research project, we were able to show that using actual local cultural Materials (not only traditional culture but also nature, tourist attractions, industry and products, great persons, etc., in the area) may embody(or materialize) Educations of virtues which is abstract usually.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1,300,000	0	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	210,000	3,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：地域文化教育、いのちの教育、こころの教育、特色ある学校

1. 研究開始当初の背景

①社会的状況

近年、地域社会や家庭の教育力の低下が指摘され、青少年のマナーの悪化や規範意識の低下が社会問題化してきている。いじめや自殺など「いのち」を軽視する傾向なども問題視されてきている。そのなかで「いのち」を大切にしているところ、大いなるものへの畏敬の念など、いわゆる「宗教的情操」の必要が説かれることも多いが、政教分離の観点から、特に公立学校でこれを行うことは問題とする意見もある。

富山の公立中学では給食や宿泊学習の食事の時に合掌の号令をかけていたが、1996年、関西から転入した父兄からの「合掌は宗教行為であり政教分離原則に抵触する」との指摘を受けて、これを中止した有名な事例がある。地元から「大いなるものへの感謝」を学ばせる意義、しつけとしての有効性から存続を求める声が挙がった。県内のキリスト教会からもやめるべきであるとの声が出なかったという。文化的少数者への配慮を行うことはもちろん必要ではあるが、地域文化を活かす方法を考えることの方が有効であったように思われる。

②文部科学省による推進事業の現状

文部科学省は道徳教育推進のための事業として、平成17年度から「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業—命を大切にす心をはぐくむ教育の推進に関する研究—」、平成18年度から「豊かな心を育てる地域推進事業」、「高・中学校「人間としての在り方生き方」教育の実践研究」、「伝統・文化等教材開発事業」など（以下、「文部科学省が行っている道徳教育推進のための事業」と略す）が進められている。これらの推進事業に関わる形で、地域文化を活かして「いのち」「こころ」を学校で教える試みが、各地で行われている。しかしながら、こうした事業は各地域でバラバラに行われているために、まとま

った形になっておらず、研究目的でのアクセスが容易でない。せっかく個々の事業で作成された報告書も埋没、散逸する危険性が高いと思われる。

地域社会の紐帯の弱化および家庭の学校化、教育家族化、核家族化の進展による世代間の生活教育の喪失によって、いわゆる教育における「しつけ」的な部分も、学校へと依存せざるをえない状況となりつつあると考えられる。

③地域と学校との連携の必要性

地域と学校との連携を深め、地域の伝統文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすことが必要である。本研究は、具体的な事例を収集分析することにより、地域文化の体験学習を通じて「いのち」「こころ」の教育を行うための実践的な方法論を見出すことを目指す。その実現は結果として、地域の教育力の学校教育への活用、学校による地域社会、文化の活性化に資すると考える。

④本研究によって期待される成果

地域の文化、社会、学校が連携して「いのち」「こころ」の教育を行うことによって、以下の3つの点において優れた効果が期待できると考える。

(1)ふさわしく行動する力の育成

従来、地域社会、家庭において行われていた「しつけ」「社会規範を獲得させる教育」を、学校教育によって補うことがより効果的にできる。

(2)生きる力の養成

具体的な地域生活の中で、体験を通じて「いのち」「こころ」を学ぶことで、より実際の生きる力の養成が可能となる。

(3)特色ある学校づくり

自文化を習得理解することで郷土意識を育成することができる。また、自文化理解を基礎とした他文化理解も可能となる。画一的教育をさげ、地域密着の特徴ある学校づくりが可能となる。

2. 研究の目的

本研究では、これまで各地の学校で行われてきた地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすための研究、教育実践例を収集し、分析類型化を行う。その結果を、データベース化することにより、教材研究等の研究を行う人たちの利用に供せるようにすることを目的とする。

さらに、以下の3つのことを行いつつ理解、考察を深める。

(1)全国で行われてきた事例をリストアップし、報告書等の収集する

(2)いくつかの地域、学校を選んで、よりインテンシブな聞き取り調査を行う

(3)研究会を開き事例を分析、類型化する

(3)を再帰的に(1)、(2)に活かすこと、新たな事例の掘り起こしなどを行うことにより、螺旋的に議論を深めてゆくことを目指す。研究会には地域の実践者を招いて情報提供を受けることも行う。

最終的には、地域文化と特色ある学校づくり、地域の伝統文化と「いのち」「こころ」の教育、地域の社会実践と「いのち」「こころ」の教育、などのテーマの論文をまとめる形で作成するとともに、教材開発を主目的としたデータベースを作成することを目標とする。

3. 研究の方法

○研究組織

本研究は、地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かした事例を分析するために、以下の3つの視角を立て、研究組織としてそれぞれ一人ずつ研究分担者が担当し、全体を研究代表者である滝沢が総括する。※

(a)特徴ある学校づくり：地域文化、伝統文化を学校運営に活かす（渡邊）

(b)地域の社会活動との関連で「いのち」「こころ」の教育を考える（弓山）

(c)地域の伝統文化都の関連で「いのち」「こころ」の教育を考える（村上）

○研究計画の概要

1)年3回程度、合同の研究会を行い、全体の研究方針、調査地の選定を行う。合同の研究会において、研究視角の修正、研究方針の修正を行う。

まず、「文部科学省が行っている道徳教育推進のための事業」の対象学校を精査し、その中から地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かす研究実践をしている事例をピックアップする。

2)ピックアップした事例の中から、さらに地域別に数校を選び、現地に赴いての聞き取り調査を行う。この調査は、研究代表者、分担者分担して行う。調査補助者として大学院の院生を同伴する。

3)調査結果および収集した資料については、大正大学設置のPCおよび書棚に集約し、すみやかな情報共有をはかる。全体合同会議において、具体的な事例発表、研究対象地域の教育担当者を学内合同研究会にまねいての専門知識の提供をうける。それら議論の結果をふまえて、適宜、調査視点の修正等を行うこととする。

4. 研究成果

[2009年度]

本研究では、これまで各地の学校で行われてきた地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすための研究、教育実践例について、資料収集および聞き取り調査を行い、その結果を分析類型化してデータベース化する。そのことにより、教材研究等の研究を行う人たちの利用に供することができるようにすることを目的とする。

その目的を達成するために、まず文部科学省において、「文部科学省が行っている道徳教育推進のための事業」の対象学校についての情報収集をおこなった。調査結果については、パソコン上にデータベース化し、それを精査して、地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かす研究実践をしている事例についてピックアップし、特色ある教育を行っている学校に対して聞き取り調査を行った。2月には兵庫県篠山私立大山小学校研究発表会、兵庫・生と死を考える会研究会（聖トマス大学）から、3月には「遍路文化を活かした地域人間力の育成」プロジェクト（鳴門教育大学）、「おせつ隊」実践（香川教育文化研究所、香川大）からの聞き取り調査を行った。

聞き取り調査を行った成果の一部については、平成22年度『大正大学教職課程年報』に論文として発表した。

[2010年度]

前年度と引き続き、文部科学省において「文部科学省が行っている道徳教育推進のための事業」の対象学校についての情報収集をおこなった。

成果発表の研究会に参加および聞き取り調査を行ったのは、埼玉県鴻巣市立笠原小学校、山梨県甲斐市立双葉東小学校、名護市立久辺中学校、糸満市立高嶺小学校、石垣市八重山教育事務所、沖縄県立八重山商工高等学校、宮古島市立砂川中学校、宮古島市立久松小学校、金武市立金武中学校、全国学校飼育動物研究大会、広島市立安佐北中学校・高等学校、豊島区立朝日小学校、北区立谷端小学校、鳴門教育大学（教員養成モデルカリキュラム研究協議会）、大阪教育大附属池田小学校など。聞き取り調査を行った成果の一部については、『宗教研究』84(2)に論文として発表した。

[2011年度]

前年度と引き続き、文部科学省において「文部科学省が行っている道徳教育推進のための事業」の対象学校についての情報収集をおこなった。

成果発表の研究会に参加および聞き取り調査を行ったのは、宮城県仙台市立七北田小学校（地域共生科）、大河原町立大河原小学校、宮城教育大学附属小学校、長野県伊那市立伊奈小学校等であった。2012年2月には、子どもといのちの教育研究会と共催で学術研究発表大会を開催した。

調査データのデータベース構築作業を進めるとともに、研究成果に基づいた論文を掲載した報告書作成した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5件）

1. 村上興匡：「伝統的な宗教文化を「いのち」「こころ」の教育に活かす試み」平成21年度 大正大学教職課程年報. 59-64 (2010)、査読無し

2. 弓山達也：「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」宗教研究 84(2). 349-372 (2010)、査読有り

3. 村上興匡：「子どもと仏教-その文化と課題を探る-」佛教文化学会紀要 第19号. 20-27 (2011)、査読無し

4. 滝沢和彦：「「いのち」「こころ」の教育実践の蓄積・展開のために-その分類・整理のための予備的考察-」大正大学教職課程年報 2010. 53-56 (2011)、査読無し

5. 齋藤知明：「地域性と道徳教育-沖縄県下の道徳教育指定校の調査から-」大正大学教職課程年報 2010. 39-52 (2011)、査読無し

〔学会発表〕（計 1件）

1. 村上興匡：「「共通の信仰」と宗教文化教育」日本デュイ学会. (20100910). 大正大学

〔図書〕（計 1件）

1. 科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（2009-2011年度）成果報告書『地域文化を「いのち」「こころ」の教育に活かすための基礎的研究』（課題番号：21653104、研究代表者：滝沢和彦、大正大学・人間学部・教授）（94頁）（2012）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝沢 和彦 (TAKIZAWA KAZUHIKO)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：60197233

(2) 研究分担者

渡邊 健治 (WATANABE KENJI)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：60513736

弓山 達也 (YUMIYAMA TATSUYA)

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：40311998

村上 興匡 (MURAKAMI KOKYO)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：40292742